発達障害児の保育における研修プログラムの開発 (2)

－保育士効力感、保育士ストレス、支援方法の実用感に着目して－

○竹澤大史¹・塩田心²・玉井一男² (非会員)

(¹愛知県心身障害者コロニー発達障害研究所・²あいち発達障害者支援センター)

キーワード：発達障害・保育士・研修

Development of in-service training programs for nursery teachers of young children with developmental disabilities

Taishi TAKEZAWA¹, Kokoro SHIOTA² and Kazuo TAMAI^{2#},

(¹Institute for Developmental Research, Aichi Human Service Center, ²Aichi Support Center for Persons with Developmental Disorders)

Key Words: developmental disabilities, nursery teachers, in-service training

目 的

保育園による発達障害のある子どもの受け入れが進む中、障害の知識や支援スキルをもつ保育士の養成を目指した研修プログラムの充実が求められている。しかし、発達障害に関する研修プログラムの形式や内容について検討し、またその効果を検証した研究はまだ少ない(高木ら, 2007)¹⁾。発達障害の支援方法としては、行動の随伴性に着目した応用行動分析や、認知特性に着目した視覚支援や構造化などが挙げられる。しかし、それらの支援方法を保育士が実際に保育の場面に導入するのはそう簡単ではない。保育場面で「気になる子」や、その対応の困難について保育士がどのように感じているかを調査した研究は見られるが(久保山・齋藤・西牧他(2009)²⁾、岡村(2011)³⁾、一方で、そういった「気になる子」への支援方法について、実際に保育士がどのように感じているか調査した研究は少ない。保育士が研修会や巡回療育で学ぶ支援技法についてどのように感じているか把握することは、助言を行う専門家にとっても重要な論点であると思われる。

そこで本研究では、発達障害のある子どもを担当する保育士を対象とした研修プログラムを試行し、その効果を検証するとともに、保育士の支援技法に関する実用感の評価と、その理由の自由記述の内容から、保育士の支援技法に対するイメージの一端を把握することを試みたい。

方 法

【参加者】A県内4市町の保育士 計179名(M:F=9:170, Age:21～57)。

【期間】平成23年6月～平成24年1月。

【研修プログラム】①発達障害のある子どもの支援についての講義を1回(4市町)。②行動観察を伴う事例検討会を3回実施した(3市町)。

【測定】①プログラムの実施前後に、保育士効力感尺度及び保育士ストレス尺度を実施した。②プログラムの実施前後に、障害(広汎性発達障害、自閉症、アスペルガー症候群、AD/HD、LD、知的障害)と支援方法(アセスメント、ストラテジーシート、視覚支援、課題分析)について、自由連想で回答をもらった。③プログラムの開始時に、支援方法(視覚支援、ストラテジーシート(岸本ら, 2004)⁴⁾、課題分析)について、「どれぐらい使えそうか」という質問で5件法による評価(5.とても使えそう、4.やや使えそう、3.どちらとも言えない、2.やや使えなさそう、1.使えなさそう)をしてもらい、併せてその理由を自由記述で回答してもらった。

結 果

- ①プログラムの終了時、実施群(講義及び事例検討会の参加者)の保育士効力感得点が有意に上昇した($p < .05$)。保育士ストレス尺度得点は、実施群、対照群ともに有意な変化はみられなかった。
- ②障害及び支援方法についての記述を、「適切なもの(C1)」「不適切ないし不十分なもの(C2)」「その他(C3)」「無回答、分からない(C4)」に分類し、質問項目ごとに「カテゴリ」×「事前・事後」のクロス集計表にカイ二乗検定またはフィッ

シャーの検定を実施した。その結果、「広汎性発達障害」について有意差がみられ($p < .01$)、残差分析ではC1では事後が有意に多く($p < .05$)、C3、C4では事前が有意に多かった($p < .05$, $p < .05$)。「LD」でも有意差はみられたが($p < .05$)、残差分析の結果ではC3でのみ事前が有意に多かった($p < .05$)。他の障害と支援方法では有意差はみられなかった。
③支援方法についての評価の結果の累計を、支援方法ごとに集計すると表1のようになった。

表 1. 支援技法の実用感の評価

	5	4	3	2	1
視覚支援	61	82	9	1	0
ストラテジーシート	19	69	52	9	0
課題分析	32	75	36	3	1

この表にカイ二乗検定を実施すると有意差がみられ($p < .01$)、更に残差分析を実施すると、視覚支援の評価5、ストラテジーシートの評価3と2が期待値よりも有意に多く($p < .01$)、視覚支援の評価3と2、ストラテジーシートの評価5が期待値よりも有意に少ない($p < .05$)ことが示された。

考 察

研修プログラムに参加した保育士の発達障害に関する知識が深まり、また保育士効力感も向上したことから、プログラムに一定の効果があったことが示された。また支援方法の中で「視覚支援」が高く評価された理由としては、保育士が「すでに利用・実践している」ことなどが挙げられる。「ストラテジーシート」では、問題解決型のアプローチが支持される一方で、理解や使用についての困難さを指摘する意見が多くみられた。保育士が発達障害の支援方法の効果を期待する一方で、理解が不十分であると実用感の評価も低くなるのは、実践への自信のなさが影響していると推測される。今後は、研修プログラムの形式や内容、測定方法等を改善し、より効果的な実施方法を検討していく。

引用文献

- 1)高木明日香・井上雅彦・篠更治(2007). 発達に気になる子どもの問題行動に対する教師研修の効果(1).日本行動療学会大会発表論文集, 33, p.500-501
- 2)久保山茂樹・齋藤由美子・西牧謙吾他(2009). 「気になる子ども」「気になる保護者」についての保育者の意識と対応に関する調査. 国立特別支援教育総合研究所研究紀要, 36, p55-76.
- 3)岡村裕子(2011). 保育者からみた「気になる子ども」についての調査研究. 滋賀大学大学院教育学研究科論文集, 14, p37-48.
- 4)岸本友宏・井上雅彦(2004). 行動上の問題のある子どもの指導にあたる教師支援の試みー研修会方式による支援効果の検討ー. 日本LD学会第13回大会発表論文集, p180-181.